

【評価表】(案)

(P1～P4 県立広島病院
P5～P7 県立安芸津病院)

【令和2年度 評価表(広島病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
I 医療機能の強化				
① 救急医療の強化	<p>■新型コロナウイルス感染症(以下「新型コロナ」という。)受入の影響から救急患者の多い冬季にドクターカーの出動の制限を余儀なくされ、救急車の受入件数は減少した。</p>	○	◎	<p>■新型コロナの影響により、ドクターカーの出動及び救急車の受入件数は減少したが、三次救急患者数、緊急手術件数については、前年度を上回る実績であり、県の救急医療に貢献している。</p>
② 脳心臓血管医療の強化	<p>■新規入院患者数について、一昨年より減少したが、目標は上回った。その他の指標・件数については、増加・減少が混在した。</p>	◎	◎	<p>■コロナ禍にあっても、重点指標である脳心臓血管センター新規入院患者数の目標を達成し、急性期の緊急カテーテル治療やインターベンション治療が増加しているなど、県立病院として高度専門医療機関の役割を果たしていることを評価する。</p>
③ 成育医療の強化	<p>■分娩件数や新生児の患者数は減少したが、新型コロナに感染した妊婦を受け入れ、総合周産期母子医療センターとしての役割は果たした。</p>	○	○	<p>■県内の出生数が急速に減少する中で、コロナ禍もあり、重点指標は目標を下回る傾向が続いているが、県の総合周産期母子医療センターとして、緊急受入やハイリスク分娩等への対応に努力している。しかしながら、NICU・GCU患者数などの重点指標については、いずれも目標を達成することができなかった。今後、妊婦などが受診しやすい環境を整備し、県全体での成育医療に関する水準向上をリードしていくことに期待する。</p>

委員評価	委員意見
◎5 ◎2	<p>■新型コロナ流行期に、トリアージ外来及び入院患者の受入れを積極的に行い、県内の医療体制維持に多大なる貢献を行った。救急車の受入れ件数減少はこの結果であり、むしろ救急医療における実績は高く評価されるべきと考える。(大毛)</p> <p>■新型コロナ対応優先で、ドクターカー出動は大きく減少、救急患者受入要請応需率はやや低下したが緊急手術は増加した。県の救命救急医療センターの拠点として重篤患者受入数や割合は増加している。三次救急患者を可能な限り断ることなく受け入れているが、医師等の働き方改革もリードすべき県立病院として、広島市の#7119の運用も始まっている中で、まずは三次救急を優先して無理なく対応できる体制整備を望む。(木倉)</p> <p>■コロナ禍にあっても、三次救急の受け入れ実績は令和元年度に比べ微増している点を高く評価した。(谷田)</p> <p>■新型コロナ対応のなか単純に救急患者数の人数のみで評価しなくて良い。県全体の医療を診る観点からドクターヘリの活用を充実させてほしい。(中西)</p> <p>■救急車受入台数は目標・前年実績に未達であるものの、搬送件数自体が大幅に減っていることからすれば、マイナス評価にはつながらないものと考えた。三次救急患者数、緊急手術件数は前年を上回っており、重篤患者受入割合も上昇している。(平谷)</p> <p>■救急患者受入要請応需率低下は新型コロナの影響でやむを得ないだろう。その中で三次救急患者については前年を上回る数を受入れているのは評価できる。(吉村)</p> <p>■コロナ禍においてもしっかり救急医療を実践している様子。県全体の医療を診る観点からドクターヘリの活用を充実させてほしい。(和田)</p>
◎7	<p>■コロナ禍でも急性期の緊急カテーテル治療やインターベンション治療は増加し、県立病院として急性期医療への高度専門医療機関の役割を果たしている。R元(元)に低下した脳血管疾患リハビリや早期リハビリの件数は大きく増加している。</p> <p>引き続き、患者の利益を第一に、地域医療機関との連携を強化しながら、在院日数の短縮とリハビリの早期介入を両立させてほしい。(木倉)</p> <p>■コロナ禍にあっても、3次医療機能を維持し続けている点を高く評価した。(谷田)</p> <p>■広島県循環器病対策推進協議会も開催され今後の対応が必要となる。(中西)</p> <p>■重点指標も達成できており、治療件数も概ね減少していない。(平谷)</p> <p>■新規入院患者数は目標をクリアした上、治療件数も概ね増加しており、専門的な治療で多くの命が救われているものと思われる。(吉村)</p> <p>■昨年度の同水準の治療件数でしっかり役割を果たしている。PCI検査のさらなる充実を図るべきである。(和田)</p>
◎5 ◎5	<p>■県全体の出生数が急速に減少する中で、コロナ禍もあり、重点指標は目標を下回る傾向が続いているが、県の総合周産期医療センターとして、緊急受入やハイリスク分娩等への対応に努力している。</p> <p>県全体の出生数の急減傾向が続く中で、新型コロナ感染妊婦・新生児への広域対応の課題も加わり、県全体、特に広島都市圏の成育医療センター機能の集約は不可欠。同時に、医師、看護師等の働き方改革と医療機能の充実の両立も必要。行政との連携の下、広島市内の基幹病院連携構想の具体化による成育医療センターの実現を急いでほしい。(木倉)</p> <p>■新型コロナに感染した妊婦の受け入れという積極的な新型コロナ対策に加え、低体重新生児の受入れに代表される3次医療機能の発揮を維持している点を高く評価した。(谷田)</p> <p>■新型コロナ感染妊婦の受入を評価する。(中西)</p> <p>■コロナ禍、また県内分娩数が減少している中で、患者数が減少・目標未達であることをもって、マイナス評価すべきか、悩ましく思った。一方で、新型コロナ感染妊婦・新生児の受入を行っていることなど、重要な役割を担っていることが重要と考える。(平谷)</p> <p>■NICUなどの患者数は目標に到達しなかったが、1,000g未満、1,500g未満の高リスクな新生児受入れは継続している。さらに、新型コロナに感染した妊婦の受け入れ、他病院からの受け入れにも積極的に評価できる。(吉村)</p> <p>■新型コロナ患者である妊婦の受入れは医療者の感染リスクを増大されるもので、医療者に敬意を表す。県立の成育医療機関としては困難な症例をどれだけ扱ったか(%)を指標にされたいと思う。(和田)</p>

【令和2年度 評価表(広島病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
I 医療機能の強化				
④ がん医療の強化	■新型コロナによる患者側の受診抑制の傾向が当院へも影響し、消化器系、呼吸器系とも患者数が減少し、各種の指標も低下した。	○	○	■新型コロナの影響により、がん患者数などの重点指標について目標及び前年度実績を下回った。 先進的ながんゲノム医療の推進については、がん遺伝子パネル検査や遺伝子カウンセリングが着実に進められており、今後は患者により多くの選択肢を提供できる体制構築を期待する。
⑤ 医療安全の確保	■新型コロナの影響下ではあったが、転倒・転落などの指標は維持できた。	◎	◎	■転倒・転落発生率の重点指標は目標以下の低い水準で維持され、アクシデント件数も減少した。 また、通常の医療安全に加え、院内感染を抑制していることを評価する。
⑥ 医療の質の向上	■チーム医療について一部上昇、一部低下など混在した。	○	○	■クリニカルパスは全国平均程度が維持されており、チーム医療の取組は実績が伸びているものが多い。コロナ禍にあっても、患者に必要な活動を維持されたことを評価する。 しかしながら、他の医療機関と比較できる指標が少なく、全国自治体病院協議会の公表データ等を活用して、同規模他施設と比較するなどして、更なる医療の質向上を期待する。
⑦ 危機管理対応力の強化	■陰圧室などの設備が十分でない中、急遽体制を整え、新型コロナの患者を多く受け入れた。	○	◎	■コロナ禍にあってもDMATの育成・研修は十分に実施できなかったが、体制維持に努力している。 また、新型コロナ対応については、県の基幹病院として総力を結集して対応している。 同時に通常医療についても救急患者の受入を制限することなく、県全体の救急医療体制の維持に貢献した。 眼前の危機に際し、院内を組織化し、全科、全職員で感染対策を取り組んでいることを評価する。感染対策の拠点となっている医療機関のお手本となることを期待する。

委員評価	委員意見
◎2 ○5	■県内全体で検診受診者数の減少により、がん患者の診療実績は低下している。むしろ患者数の減少を最小限に抑えたという印象である。(大毛) ■コロナ禍で、重点指標も各実績も前年度をやや下回った。最新のがんゲノム医療の推進については、がん遺伝子パネル検査や遺伝子カウンセリングが着実に進められている。 ポストコロナのがん医療体制の充実について、広島市内基幹病院によるHIPRACの共同利用に続いて、遺伝子解析による診断に基づく最適治療についても市内基幹病院間の役割分担と連携を進めてほしい。(木倉) ■先進的なゲノム医療の推進がなされ、がん医療の幅が広がったと理解できるが、深刻な進行がんを有する患者へのアプローチについての記述をいただきたい。(谷田) ■県立病院が取り組んだがんゲノム医療に期待する。消化器、呼吸器センター以外でのがん治療はこれからどのような運営していくのか。(中西) ■重点指標・前年実績にも未達であるもの、患者側の事情が大きく、マイナス評価とすべきか、悩ましく思われた。(平谷) ■受診抑制の傾向の中で、患者数が減ったのはやむをえないこと。(吉村委員) ■コロナ禍で、がん患者の治療が減少するのは仕方がない。 患者により多くの選択肢が提供できる体制を構築してほしい。(和田)
◎6 ○1	■転倒・転落発生率の重点指標は低く維持され、アクシデント件数もやや減少した。新型コロナ患者の受入拠点病院の中心的役割を果たす中で一般診療も継続したが、院内感染や職員の感染はなかった。(木倉) ■通常の医療安全に加え、院内感染を抑制している点を高く評価した。(谷田) ■新型コロナ患者を多数引き受けたなか院内感染が起こらなかったことを高く評価する。 感染対策を他病院や介護施設等に対して研修・指導を希望する。(中西) ■新型コロナ患者を受入れつつ、クラスター等も無く、重点指標も達成できていた。(平谷) ■転倒・転落発生率は引き続き低いレベルに抑えた。新型コロナ対策も充実していた。(吉村) ■新型コロナの院内感染がなかったことはよかった。アクシデントが平均月2回はすこしい。(和田)
◎2 ○4 △1	■クリニカルパスは全国平均程度が維持されている。コロナ禍にあっても、チーム医療の取組は実績が伸びているものが多い。しかし、他の医療機関と比較できる指標が少ない。取組方針では、データの比較活用による質の向上をあげている。 県立病院は全国自治体病院協議会の医療の質の評価・公表等推進事業に参加しているが、NDBの活用も含めて、できるだけ多くの項目と比較した指標を示してほしい。(木倉) ■コロナ禍にあっても、患者に必要な活動を維持されたことを高く評価する。(谷田) ■栄養サポートは、患者側の事情により影響する要素も大きいように思われる。(平谷) ■チーム医療の算定件数はほぼ増加。前年度は活動停止だった糖尿病チームも復活した。(吉村) ■在宅復帰率や再入院率が全国平均並みである。(和田)
◎7	■コロナ禍にあっても、県全体の基幹災害拠点病院としての、DMATの育成・研修は十分に実施できなかったが、DMATの体制維持に努力している。R2年7月の熊本豪雨等への対応では貢献している。新型コロナについては、感染症指定病院ではないが、県の拠点病院として総力を結集し県全体を支援している。同時に通常医療についても救急患者の受入は制限しておらず、県全体の救急医療体制の維持に大きく貢献した。毎年の豪雨等の自然災害に加えて、新興・再興感染症についても体制強化が必要と再認識された。 医療法改正により感染症対策が県の医療計画に追加されることになったが、新型コロナ対策の経験をしっかりと踏まえて、マンパワーの平時からの育成と緊急時の集約も含めて、感染症についても県全体の基幹病院として役割分担と機能連携をリードしてほしい。(木倉) ■眼前の危機に際し、院内を組織化し、全科、全職員で感染対策を取り組んでいることを高く評価する。 県内の感染対策の拠点となっている医療機関のお手本となっていることを期待している。(平谷) ■新型コロナに対する対応を高く評価する。(中西) ■DMAT研修等の指標は大幅未達だが、主催者側の事情とすればやむを得ないもの。(平谷) ■感染症指定病院ではないが、職員の努力で新型コロナ患者を積極的に受け入れた。(吉村) ■新型コロナ対応がまさに危機対応で、広島病院は県の中心的役割を担っており危機に対する対応はしっかりとできていた。(和田)

【令和2年度 評価表(広島病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
I 医療機能の強化				
⑧ 地域連携の強化	<p>■新型コロナの影響で訪問活動数などが低下した。</p>	○	○	<p>■重点指標である、患者紹介率は前年度に比べ低下したが、逆紹介率は目標を上回った。</p> <p>コロナ禍で、平時のような医療機関や医師会との連携は十分できなかったが、WEB研修会やKBネット等による連携に努力していることを評価する。</p> <p>今後は、オンライン診療の普及や政策医療の実現に関して、県下の基幹病院との連携などを進めていくことを期待する。</p>
II 人材育成機能の維持				
⑨ 医療人材の育成■ 確保	<p>■医科、歯科とも研修医についてマッチング率100%は維持し、設定した定数の人員は確保できた。地域医療従事者に対する研修は新型コロナ対策のため中止せざるを得ず、参加数は減少した。</p>	○	○	<p>■重点指標である、指導医数及び医師・看護師等の講師派遣数は目標を達成したが、新人看護師の離職率は未達成であった。</p> <p>初期臨床研修医や専門研修医の受入拡充による県内定着医確保のために魅力ある研修体制の構築とともに、医師、看護師等の派遣機能の更なる充実を期待する。</p>
III 患者満足度の向上				
⑩ 患者満足度の向上 ■広報の充実	<p>■患者アンケートの満足度においては、「外来待ち時間の満足度」が目標を達成することができなかったが、入院・外来の総合満足度は目標数値を達成できた。</p>	○	○	<p>■アンケートを繰り返し実施し、入院・外来の患者満足度がいずれも目標を上回り、90%後半と高い満足度を維持している点进行评估する。特に、駐車場待ち車列のない日が大幅に増えている。</p> <p>一方、外来待ち時間の満足度が目標を下回っていることから、他病院の情報入手しつつ、オンライン診療等も含め、満足度向上のための対策を講じる必要がある。</p>

委員評価	委員意見
◎1 ○6	<p>■コロナ禍で、平時のような医療機関や医師会との連携は十分できなかったが、WEB研修会やKBネット等による連携に努力している。重点指標である患者の紹介率はやや低下したが、逆紹介率は目標を上回った。</p> <p>広島都市圏の地域連携については、県立病院単独での地域医療機関・医師会との連携だけでなく、市内基幹病院相互の役割分担も図りながら、紹介・逆紹介、在宅移行、急変時の受入などが円滑に進むよう、地域医療構想・地域包括ケアを推進してほしい。県全体の地域連携をサポートする県立病院としては、新型コロナの経験も踏まえて、KBネットだけでなく、県全体のHMネット普及をリードし、診療情報の共有を進めてほしい。(木倉)</p> <p>■他施設からの紹介は微減であるが、他施設への紹介は増加していることから、連携先との役割分担が進められたものと理解し、高い評価とした。(谷田)</p> <p>■KBネットにあまり固執することないように。(中西)</p> <p>■患者紹介率の低減は、新型コロナ対応を理由にはしづらい部分もあると思われる。医療体制はもちろん、待ち時間や駐車場等の利便性等もアピールできる面も多いと思う。(平谷)</p> <p>■入退院支援加算が昨年比減少したことは残念。(和田)</p>
○7	<p>■初期臨床研修医の県内定着率はやや低下した。新型コロナ対応の中で、地域の看護師への院内研修の開催等は低下したが、医師・看護師等の講師派遣は目標を達成して努力している。</p> <p>初期臨床研修医や専門研修医の受入拡充による県内定着医確保のために、さらに魅力ある研修体制に努力してほしい。タスクシフトのためには、認定・専門看護師の養成をさらに進めてほしい。県を代表する基幹病院として、働き方改革を進め、医師、看護師等に魅力ある職場となるよう、市内基幹病院との役割分担・機能集約を進めてほしい。(木倉)</p> <p>■現有人材について、感染対策の組織的活動がなされている点を高く評価したが、新人の離職については残念な結果である。せっかく県立病院で働く機会を得たのに、短い期間で退職してしまうことはもったいない限りである。せめて多くを学び身に付けてからになるよう対策を講じてほしい。(谷田)</p> <p>■医療人材の確保は病院全体の高い評価の上に成り立っているが医師、看護師等の派遣機能を充実させてほしい。(中西)</p> <p>■各種研修が新型コロナの影響で、中止になっている。課題の中にあるように、新しい研修の方式を構築し、人材育成に努めてほしい。(吉村)</p>
◎1 ○6	<p>■アンケートを繰り返し実施し、全体として高い満足度を維持している。</p> <p>■駐車場待ち車列のない日が大幅に増えている。外来待ち時間の満足度が向上している。駐車場の外来待ち時間の改善はいいことだが、都市中心部の病院であり、無料送迎バスの利用状況が低くて廃止したように、もともと公共交通至便な場所であり、患者の賢い利用を呼びかけるべきである。取組の重点を見直してほしい。外来待ち時間については、他病院では初診対応と再診予約の入れ方等を工夫し改善されている例がある。午後外来の導入やオンライン診療等も含め、工夫を進めてほしい。ジェネリック医薬品の使用割合は高く伸びしろも少なくなっており、患者満足度の指標としては特掲しなくていいのではないかと。(木倉)</p> <p>■患者満足度が極めて高い点进行评估した。(谷田)</p> <p>■診察前の検査、診察への流れは基本的にスムーズで、予約時刻から大幅に待つことは少ない印象。駐車場が渋滞となっている事実は認められず、他総合病院に比べ駐車場問題は少ないように感じられた。受診前に案内される待合場所は若干密になっているように見受けられる(周囲にも待合場所があるが、案内されるとその場に向かう人が多い印象)。会計待ちの席で混み合う場面が散見される。(平谷)</p> <p>■アンケートの満足度は、外来待ち時間が目標に達していないものの、概ね高く、駐車場待ち時間も改善している。(吉村)</p>

【令和2年度 評価表(広島病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
Ⅲ 患者満足度の向上				
⑪ 業務改善	<p>■コロナ禍で活動の一時中止や日程の変更を余儀なくされたため、十分な活動ができないう1年間ではあったが、三密の回避など対策を臨機応変にとり、一定の活動はできた。</p>	○	○	<p>■コロナ禍で、TQMサークルの活動数は一時的に減少したが、「広島県医療の改善活動推進協議会」が新たに発足するなど、院内だけでなく地域へのTQMサークル活動や5S活動の普及に努力していることを評価する。</p> <p>業務改善活動は患者の安心につながるものであり、成果を積極的にアピールして信頼を高めることを期待する。</p>
Ⅳ 経営基盤の強化				
⑫ 経営力の強化	<p>■新型コロナの流行により、一部の病棟の運用を休止したことや、手術の実施を制限したことにより、新規入院患者数、病床稼働率ともに前年度を下回り、目標を達成することができなかった。</p> <p>一方で、病床数が限定されたことから、限られた病床で入院の応需体制を維持するべく、在院日数の適正化が進展し、在院日数の短縮が図られた。</p>	○	○	<p>■新規入院患者数、病床稼働率と共に前年度、目標値を下回ったが、在院日数の適正化が進み、在院日数の短縮につながった。</p> <p>新型コロナを契機に今後も外来、入院患者数の減少を危惧しており、現状の目標値を死守するつもりで経営に邁進してほしい。そのためにも、取組方針にある「事務系専門資格職の採用等による事務部門の強化」とともに、病院経営の分析力と実践力のある専門人材の養成を期待する。</p>
⑬ 増収対策	<p>■令和2年度診療報酬改定の内容を有効活用でき、多くの項目について届出・算定を開始した。入院単価は改定によるもの、在院日数の適正化などの取組が奏功し、前年度実績及び目標を上回ることができたが、患者数が減少し、全体として減収となった。</p>	○	○	<p>■入院単価は、目標及び前年度実績を上回ったが、新規・延入院患者数は、昨年に続き前年度を下回った。入院患者数減少は、コロナ禍のみならず、この数年の傾向であり、患者数獲得だけでは解決できない構造的な課題である。診療報酬請求事務委託事業者やレセプト点検員の増員だけでは効果は小さく、根本的な収入構造の見直しが必要である。</p> <p>また、医事の強化が経営にとっても重要であり、それぞれの医療職が診療報酬の加算等に対して理解することも必要である。</p>
⑭ 費用合理化対策	<p>■新型コロナによる感染防止対策に係る消耗品などの購入単価が高騰し、診療材料の消費額が増加したことなどにより、収益に対する比率は悪化した。</p>	○	○	<p>■材料費は新型コロナの影響で収益に対する比率は悪化しており、光熱水費の減少も病棟の休止が理由で、積極的な対策によるものではないと考える。後発医薬品でもさらにフォーミュラーの採用による、基本的な医薬品・医療材料等の見直しを徹底するとともに、更なる共同購入の推進や委託費などの費用コントロールの検証などの対応をしなければならぬ。</p>

委員評価	委員意見
◎2 ○5	<p>■コロナ禍の中で活動サークル数は一時的に減少したが、広島県医療の改善活動推進協議会が新たに発足するなど、院内だけでなく地域へのTQMサークル活動や5S活動の普及に努力している。</p> <p>業務改善活動は患者の安心につながるものであり、成果を患者に積極的にアピールして信頼を高めてほしい。県立病院として新たな推進協議会の活動拡大にも努力して県内に普及させてほしい。(木倉)</p> <p>■これまでの活動の継続が組織全体の活力に影響を与えているものとする。TQM活動に多くの職員が参加していることで、臨機応変な対応を可能にするものと思う。(谷田)</p> <p>■TQM活動のさらなる展開を期待する。(中西)</p> <p>■活動の難しいコロナ禍にもかかわらず、できることに取り組んでいる。(吉村)</p> <p>■5S活動はとて素晴らしい活動である。継続してほしい。(和田)</p>
◎1 ○5 △1	<p>■重点指標の新規入院患者、病床稼働率ともに低下しているが、これはここ数年継続した傾向であり、新型コロナだけでなく、人口減少や高齢化なども影響した構造的なものではない。</p> <p>取組方針には、「医療需要の把握、医療情報による経営分析」や「必要に応じた病床規模や診療科構成の見直し」とある。新型コロナ対応で1病棟を緊急用として使用しなかった状況も踏まえて、人口構造の変化や患者動向に対応して診療科や病床規模を見直すべきである。次期経営計画での的確な目標設定のためには、市内基幹病院や県内全体の患者動向や病床稼働率も含めた分析を踏まえる必要がある。そのためにも、取組方針にある「事務系専門資格職の採用等による事務部門の強化」とともに、隣接の県立大学の専門職大学院MBAコースと連携して、病院経営の分析力と実践力のある専門人材を養成してほしい。(木倉)</p> <p>■通常医療と感染症対策のトレードオフが連発的になされたものと評価した。(谷田)</p> <p>■今年度は新型コロナの影響があまりに強かったことで特に意見はない。(中西)</p> <p>■新型コロナ対応等により、病床稼働率を単純に数値で評価することは難しいと思われた。(平谷)</p> <p>■新規入院患者数、病床稼働率と共に前年度、目標値を下回ったが、在院日数の適正化が進み、在院日数の短縮につながった。(吉村)</p> <p>■新型コロナを契機に今後も外来、入院患者数は減少するのではないかと危惧している。現状の目標値を死守するつもりで経営に邁進してほしい。(和田)</p>
◎1 ○4 △1	<p>■入院単価は、前年度実績も目標も上回ったが、新規・延入院患者数は、昨年に続き前年度を下回った。入院患者数減少は、コロナ禍だけでなくこの数年の傾向であり、「課題」にあるような患者数獲得だけでは解決できない構造的な課題である。診療報酬改定に応じた的確な請求や未収金対策の徹底は、当然のこと。支払基金等のコンピューター審査もR3年10月から始まり9割目標まで本格化していき、請求誤りも受付時に自動チェックされるようになる。請求事務委託業者やレセプト点検員の増員だけでは効果は小さく、根本的な収入構造の見直しが必要である。入院患者の減少、在院日数の短縮の流れの中で、広島都市圏の基幹病院間の役割分担と集中を進めなければ、大きな収支改善は見込めない。地域医療構想の下で、具体的な取組を早急に進める必要がある。(木倉)</p> <p>■保険診療、政策医療。医療事業と政策事業。そこに感染対策が加わっている。国難といえる事態にあつて増収対策を評価することに違和感を覚えるため評価不能とした。(谷田)</p> <p>■入院単価の指標を達成しており、未収金も減るなどを評価した。患者数の減少は、やむを得ないものと考え評価において考慮しなかった。(平谷)</p> <p>■入院単価は前年度比、目標比ともにプラスだった上、診療報酬改定に伴う16件の新規届け出を行い増収に努めた。未収金も減った。(吉村)</p> <p>■入院単価のアップに新型コロナ患者の影響や新規の加算項目の影響がどの程度かを分析してほしい。医事の強化が経営にとっても重要である。またそれぞれの医療職が診療報酬の加算等に対して理解することが必要である。(和田)</p>
◎4 △2 -1	<p>■新型コロナ対策の影響もあるが、基本的に医療技術の高度化で材料費比率は毎年上昇している。後発品使用割合は高いが、もう伸びしろは小さい。共同購入による削減額は伸びている。光熱水費は減少しているが、これは新型コロナ対策で1病棟休止によるもの。後発品でもさらにフォーミュラーの採用など、基本的な医薬品・医療材料等の見直しを徹底することは当然だが、効果は限定的。</p> <p>医療技術の高度化、高価な医薬品・医療材料の開発は著しく、県立病院だからといっても、あらゆる分野の高度医療に対応することには限界がある。近距離にある広島市内基幹病院の間の役割分担で、強みある分野をより強化し、相互の紹介・連携の仕組みを進めるべきである。(木倉)</p> <p>■保険診療で扱わない診療材料費を医療収益と対比することに合理性を見出せない。(谷田)</p> <p>■電気・ガス・水道の使用量は削減されているが患者減との関係もあり得ると考えられた。材料費割合は引き続き増加している。やむを得ないとの説明も従来あつたが引き続き説明を求めたい。(平谷)</p> <p>■材料費は新型コロナの影響で収益に対する比率は悪化。光熱水費の減少も病棟の休止が理由で、積極的な対策によるものではない。(吉村)</p> <p>■費用でもっとも重要なものは人件費であり、削減はどう向き合つかを示してほしい。(和田)</p>

【令和2年度 評価表(広島病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
V 目標指標				
⑮ 決算の状況	<p>■新型コロナの患者を受け入れ、一部の診療を制限したため、患者数・収益ともに減少したが、医療政策の担い手として各種の補助金が投入され、結果として経常収支は黒字となった。</p>	○	○	<p>■新型コロナによる病棟休止、患者数減少、外来受診や手術件数の減少が加わったが、病床確保料等の他会計補助金があり、黒字となった一方で、通常医療の機能を制約された条件の下で最大限発揮した結果として、黒字になったとの見方も可能である。</p> <p>人口減少の流れが変わらない中においては、診療機能や病床の選択と集中が必要である。</p>
⑯ 目標指標の達成状況	<p>■計画で定める項目についての達成状況は悪化したが、新型コロナに対応し、県民の健康面での安全・安心のニーズには応じることができた。</p>	—	—	<p>■未達成項目は18項目であり、昨年度の11項目から、増加している。コロナ禍の影響もあるが、人口減少と高齢化の構造的な問題で未達成のものも多いと思われる。</p> <p>当面の改善努力は続けながらも、県全体をリードすべき県立病院として地域医療構想の方向性を先取りする形で診療科、病床、人員配置などの根本的な見直しが必要である。</p>

委員評価	委員意見
◎1 ○5 △1	<p>■前期R元は、この数年來の人口減少、外来・入院患者減少、医療の高度化による材料費の上昇で、H20以来の赤字になった。第4四半期の新型コロナの影響はあるが、それは約200万円の収支悪化にとどまると推計された。今期R2は、新型コロナによる1病棟休止、患者数減少、外来受診や手術の減少が加わったが、コロナ病床確保料の補助金19億円等があり、黒字となった。しかし、基本的収支構造は昨年同様の赤字である。人口減少の流れは変わらず、次期経営計画では診療機能や病床の役割分担と集中が必要。コロナ禍でのこの見直しの必要性は一層明らかとなった。広島都市圏の基幹病院の役割分担の具体的な数字が直ちに合意できなくても、方向性を見通しながら次期計画の目標設定を行うべきではないか。(木倉)</p> <p>■診療収入の減収分を病床確保料で補填したという見方もできるが、一方で通常医療の機能を制約された条件の下で最大限発揮した結果黒字になったとの見方も可能である。実績をみるに、後者の可能性が高いと判断する。</p> <p>費用と収益を事業単位でマッチングさせるセグメント会計を実施して、通常の医療事業と政策事業、緊急対策事業での収支を明らかにしていきたい。(谷田)</p> <p>■新型コロナ感染症の影響が大きいため意見は保留する。(中西)</p> <p>■病床確保料がなくなった後の対応、特に県の対応を検討のうえ県民に示されることが、県民の医療への安心維持のためにも重要なのではないかとと思う。(平貝)</p> <p>■新型コロナ患者受け入れによる病床確保料により、収支が改善したことは評価できる。(吉村)</p> <p>■補助金で資金的余裕ができたので、これを医療職へどう還元するかを検討すること。(和田)</p>
—	<p>■未達成項目は、H30の5項目、R元の11項目から、R2は18項目と大きく増加している。コロナ禍の影響もあるが、人口減少と高齢化の構造的な問題で未達成のものも多いと思われる。当面の改善努力は続けながらも、次期計画では、県全体をリードすべき県立病院として地域医療構想の方向性を先取りする形で診療科、病床、人員配置などの根本的な見直しが必要である。(木倉)</p> <p>■今回の新型コロナに対する県病院の対応は高く評価される。新型コロナ対応をした医療機関は高く評価しているが、県民に対するアピールには欠けた。(中西)</p>

総合評価	<p>■今年度は、新型コロナの流行にも関わらず、影響を最小限に抑えつつ、県立病院としての役割を果たし、県内医療体制の維持に貢献したことは評価されるべきと考える。</p> <p>一方、基本的な収支構造は、人口減少及び医療材料の高額化等の傾向の影響が大きくなっている。県全体も広島都市圏も、さらなる人口減少と高齢化は避けられないもので、従来どおりの病院経営での状況改善は難しく、強みとする診療機能への重点化が必要である。</p> <p>新型コロナに見られるような感染症への対応を新たに追加した医療計画の策定作業が始まるが、長期的な人口構造の変化は変わらない。県立病院は、県の直営の拠点病院として、率先して地域医療構想をリードしていくことが求められ、中長期的に広島都市圏の基幹病院との間で県立病院が担うべき役割を明確にして、強みを伸ばすべき分野に機能を集中することを期待する。</p>
------	---

◎4 ○3	<p>■新型コロナウイルスの流行にも関わらず、影響を最小限に抑えつつ、県立病院としての役割を果たし、県内医療体制の維持に貢献したことは高く評価されるべきと考える。(大毛)</p> <p>■今期は経営計画4年間の最終年度であり、コロナ禍の大きな影響が新型コロナ病床確保料の補填で緩和されたが、基本的な収支構造は、赤字となった昨年度R元年度と変わらず。人口減少と高齢化による患者減少、医療材料の高額化等の傾向は大きくなっている。県全体も広島都市圏も、さらなる人口減少と高齢化は避けられないもので、従来どおりの病院経営での状況改善は難しく、強みとする診療機能への重点化が必要である。</p> <p>H28.3からの地域医療構想では、「広島市においては高度な医療を提供する病院が近距離に立地しており、4基幹病院においては、高度医療の充実や人材の確保・育成に向け、一定の集約や役割分担を図る必要があります。」と記載されている。新型コロナに見られるような感染症への対応を新たに追加した医療計画の策定作業が始まるが、長期的な人口構造の変化は変わらない。県立病院は、県の直営の拠点病院として、率先して地域医療構想をリードしていくことが求められ、中長期的に広島都市圏の基幹病院との間で県立病院が担うべき役割を明確にして、強みを伸ばすべき分野に機能を集中してほしい。新型コロナの収束時期が見通せず、数値目標の設定にも制約があると思うが、新たな経営計画の期間中でも取組の方針・項目・指標について見直ししながら診療機能の見直しを進めてほしい。(木倉)</p> <p>■パンデミックという事態に際して、通常時に期待される機能も緊急時に期待される機能もともに発揮されていることを確認し、高い評価とした。(谷田)</p> <p>■新型コロナに対する県病院の対応を高く評価する。</p> <p>■新型コロナが収束したあとの病床運用や診療体制の検討が必要。(中西)</p> <p>■コロナ禍にあって、県立広島病院の存在意義は大きく示され、広島県の医療への信頼につながったと思う。(平谷)</p> <p>■臨機応変に新型コロナ対応を進め、県民の安全・安心を支えていただいていることは感謝しかない。新型コロナの感染拡大が収まった際に、「失われた〇年」とならないよう、改善、改革も検討する必要がある。(吉村)</p>
----------	--

【令和2年度 評価表(安芸津病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
I 医療機能の強化				
① 専門医療・政策医療	<p>■近年の入院患者数はH29をピーク(33,545人)として減少傾向となっている。R2の延入院患者数は、新型コロナウイルス感染症(以下「新型コロナ」という。)等の影響もあり、26,608人となった。</p> <p>■手術件数や内視鏡検査件数も入院患者数の減少に伴い前年度を下回ったが、手術件数は前年比約6%減に止めることができた。</p> <p>■救急搬送受入件数についても、割合は大きく変わっていないが、救急搬送件数全体が昨年より大幅に減少しており、対目標・前年度とも下回った。</p>	△	○	<p>■中山間地域の人口減少・高齢化先行地域で、入院患者数の減少は続いており、やむを得ない面があるが、重点指標の手術件数と内視鏡検査件数が減少している。</p> <p>一方、人工関節手術の強みを活かして、骨粗鬆症外来、置換術後のアフターケア外来、アウトリークリニックなど、新たな取組も加えながら、地域包括ケア推進のために重要な自立支援に努力している。</p> <p>政策医療では、安芸津地区の救急受入れ、大崎上島町の小児健診に貢献している。</p>
② 地域包括ケアシステム構築への貢献	<p>■安芸津町内のケアマネとの定例会の開催や退院時支援の充実、地域の医療機関・施設との連携など、新型コロナ対応で定例会等の回数は減少したが地域関係者と連携強化を図った。</p> <p>■訪問看護実施数は目標を達成したが、前年度実績からは減少した。</p>	○	○	<p>■地域包括ケアのモデル確立のために、ケアマネとの協議会や介護施設への研修参加案等で地域連携を強化するとともに、地域包括ケア病床を活用し、退院時も社会福祉士や介護職と連携して支援するなど一貫した地域生活支援に努力している。</p> <p>また、コロナ禍で重点目標のケアマネ集いの会などは減少したものの継続されており、訪問看護や健(検)診件数も、目標を上回った。地域包括ケア病床からの在宅復帰率もさらに向上している。</p> <p>一方、コロナ禍でやむを得ないが、入院患者への歯科医院との連携によるミールラウンドがゼロとなった。</p>
③ 医療安全の確保	<p>■5S活動といった手法も取り入れて医療安全の確保に引き続き努めており、転倒・転落発生率(レベル2以上)が前年度より減少した。</p>	○	○	<p>■5S活動の手法により、転倒・転落の発生率は低下しており、コロナ禍でも、毎月、医療安全・感染症対策研修会の開催が継続されている。</p> <p>転倒・転落予防の体制は、確実に定着するよう5S活動等を継続してほしい。安芸津病院の医療安全のノウハウは、医療資源の少ない高齢化先行地域では極めて重要であり、新型コロナの予防対策を徹底しながら、地域の介護施設等にもWEB研修など工夫しながらノウハウを伝えて、地域全体の医療介護機能の維持継続を期待する。</p>

委員評価	委員意見
○5 △1	<p>■中山間地域の人口減少・高齢化先行地域で、入院患者数の減少は続いており、やむを得ない面があるが、重点指標の手術件数と内視鏡検査件数が減少している。手術件数の減少は緩和された。人工関節手術の強みを活かして、骨粗鬆症外来、置換術後のアフターケア外来、アウトリークリニックなど、新たな取組も加えながら、地域包括ケア推進のために重要な自立支援に努力している。開始して間もないが、受診者は増加している。政策医療では、安芸津地区の救急受入れ、大崎上島町の小児健診に貢献している。</p> <p>健康寿命延伸のために予防・健康づくりが重視されてきている。内視鏡検査は予防に有効であり、協会けんぽ、国保、後期高齢者医療広域連合と協力して加入者に呼び掛け活用すべきである。(木倉)</p> <p>■通年にわたる新型コロナの影響で診療に制約がかかり、患者の受診行動も消極的になったと想定されることから、目標未達ではあるものの機能の発揮はなされたものと評価した。(谷田)</p> <p>■新型コロナの影響が大きい件数の減少のみで評価しないように。新型コロナに影響されない部門の検証を。(中西)</p> <p>■手術件数は、目標数が高すぎるように思われた。新型コロナ対応の中での手術数、入院・外来の患者数として考えると、一定の評価はできる。(平谷)</p> <p>■手術件数は前年比6%減にとどまっているとしても目標の達成率としては3分の2程度、内視鏡検査数が4分の3程度のため、前年度の評価より下げた。(吉村)</p> <p>■訪問診療(アウトリークリニック)の伸びを評価した。救急搬送が減少した理由は新型コロナの影響と考える。(和田)</p>
◎2 ◎5	<p>■高齢化先行地域で、地域包括ケアのモデル確立のために、日頃からケアマネとの協議会や介護施設への研修参加案等で地域連携を強化してきた。また、地域包括ケア病床を活用し、退院時も社会福祉士や介護職と連携して支援し、退院後の電話訪問、訪問看護など一貫した地域生活支援に努力してきた。予防についても、地域での公開講座や健康相談、外来カンファレンス、診察後のフォローなど、高齢者に丁寧な活動を継続してきた。コロナ禍でも重点目標のケアマネ集いの会などは、減少したが継続されている。訪問看護や健(検)診件数も、目標を上回った。地域包括ケア病床からの在宅復帰率もさらに向上している。</p> <p>コロナ禍でやむを得ないが、入院患者への歯科医院との連携によるミールラウンドがゼロとなった。口腔ケアは高齢者のQOLに重要であり、ぜひ実施し頻度をあげてほしい。(木倉)</p> <p>■対面での集会は避けながら連携を強化されたということで、在宅復帰率のアップや訪問看護実施数が維持されている点を高く評価した。(谷田)</p> <p>■新型コロナの時期にこそ、さらなる連携が必要。(中西)</p> <p>■コロナ禍にあっても、多くの重点指標で目標達成されており、努力を窺うことができた。(平谷)</p> <p>■地域内での連携の強化の進展がうかがえる。訪問看護数も目標値に達している。(吉村)</p> <p>■地域への貢献活動としては、健(検)診と訪問看護が重要な指標と考える。(和田)</p>
◎1 ◎6	<p>■高齢化先行地域だが、5S活動の手法も取り入れて、転倒・転落の発生率は低下している。コロナ禍でも、毎月、医療安全・感染症対策研修会の開催が継続されている。新型コロナ対策を図りながら、感染症外来も適切に継続されている。</p> <p>転倒・転落予防の体制は、確実に定着するよう5S活動等を継続してほしい。安芸津病院の医療安全のノウハウは、医療資源の少ない高齢化先行地域では極めて重要であり、新型コロナの予防対策を徹底しながら、地域の介護施設等にもWEB研修など工夫しながらノウハウを伝えて、地域全体の医療介護機能を維持継続してほしい。(木倉)</p> <p>■感染症外来の実施にともない、感染対策について職員の皆さんの意識が高く保たれているものと評価した。(谷田)</p> <p>■5S活動を活発に願う。(中西)</p> <p>■実数も割合も、減少している。(平谷)</p> <p>■転倒・転落の発生率は引き続き少なく、前年より減少している。研修会の件数減は新型コロナ対応の影響とのことでやむを得ないのではないか。(吉村委員)</p>

【令和2年度 評価表(安芸津病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
I 医療機能の強化				
④ 医療の質の向上	<ul style="list-style-type: none"> ■多職種連携、チーム医療に取り組んでいる。 ■糖尿病チームは、フットケア外来の充実(月2回)を行うなど積極的に活動している。 	○	○	<ul style="list-style-type: none"> ■コロナ禍にあっても多職種によるチーム医療の各種委員会・チームの活動が進展していることを評価する。 特に、認知症チームや糖尿病チームは活発に活動しており、ノウハウが途絶えないよう継続することを期待する。
⑤ 危機管理対応力の強化	<ul style="list-style-type: none"> ■新型コロナ対策に、県の要請等に対応し取り組んだ。 ■研修会開催は新型コロナ対策の関係上、中止とした。 ■耐震化に関する専門部会等により、旧棟の耐震化について、具体的な検討を進めた。 	○	○	<ul style="list-style-type: none"> ■新型コロナ対応について、ドライブスルー方式での検査など工夫しており、感染症疑い患者受入協力医療機関の指定を受け、病床を確保しながら発熱外来の設置、院内検査の実施など、適切に対応していることを評価する。地域の拠点として、他の医療機関や介護施設にもノウハウを指導しながら、徹底した対策を続けていくことを期待する。 また、豪雨災害に備えた対策に万全を期するとともに、耐震化対応について早急に具体化を図ってほしい。
II 人材育成機能の維持				
⑥ 医療人材の育成・確保	<ul style="list-style-type: none"> ■初期臨床研修医の地域研修の受入に取り組んだ。 ■例年は、看護学生や救急救命士等の実習受入を行い、医療人材の育成に努めているところであるが、新型コロナ対策の関係上、受入を中止とした。 	○	○	<ul style="list-style-type: none"> ■高齢化先行地域での地域包括ケアのモデル病院として、コロナ禍にあっても総合診療医を目指す初期臨床研修医の研修受入などに努力している。また、現有的人材の育成が、感染症対策を機に広く行われたものと理解している。 コロナ禍にあつて、看護師等の実習受入は中止せざるを得なかったが、次年度に期待する。

委員評価	委員意見
○7	<ul style="list-style-type: none"> ■コロナ禍にあっても多職種によるチーム医療の各種委員会・チームの活動は継続されている。特に、認知症チームや糖尿病チームは活発に活動している。多職種チームの活動は、入院中の医療の質の向上とともに、退院後の生活の支援に役立つものであり、高齢化先行地域においては大変重要なものである。 活動ノウハウが途絶えないよう継続に努力してほしい。(木倉) ■多職種によるチーム医療が進展していることを高く評価した。(谷田) ■各委員会・チームの活動実績をもう少し具体的に「取組内容」に記載いただけると、より取組がわかりやすいと思う。(平谷) ■多職種が連携したチーム医療、アウトリークリニックの活動が拡充されている。(吉村) ■クリニカルパスの適用%を増やすこと。認知症ラウンドは増加しており、好ましい傾向である。(和田)
◎1 ○5 △1	<ul style="list-style-type: none"> ■新型コロナ対応については、当初からのドライブスルー方式での検査など工夫している。県の感染症疑い患者受入協力医療機関の指定を受け、病床を確保しながら発熱外来の設置、院内検査の実施など、適切に対応してきている。 新型コロナ対策については、地域の拠点として、他の医療機関や介護施設にもノウハウを指導しながら、徹底した対策を続けてほしい。毎年の豪雨災害に備えて、災害対策に万全を期してほしい。専門部会で耐震化の方向性は示されたが、その具体化について早急に具体化を図ってほしい。(木倉) ■地域の医療機関や介護施設への感染症対策の指導や確認など、できることがあったのではないかとと思う。(谷田) ■耐震化の検討がどのようにこれから行われるのか心配である。(中西) ■県の要請に応じ、新型コロナ対策に取り組んでいる。新型コロナ疑い者の受け入れ実績はなかったものの、帰国者・接触者外来患者の受け入れ数や発熱外来の設置など、地域住民にとって一番充実してほしい医療をしっかりと支えている。(吉村) ■地域での感染対策研修がゼロだが、WEBで行うなどの方法を検討すべきであった。新型コロナ対応はしっかりとできている。(和田)
○6 △1	<ul style="list-style-type: none"> ■高齢化先行地域での地域包括ケアのモデル病院として、コロナ禍にあっても総合診療医を目指す初期臨床研修医の研修受入などに努力している。看護師等の実習受入は中止せざるを得なかった。県立広島病院の支援のために、看護師の派遣を行っている。 医師退職後の後任確保が課題である。特に高齢者の多い地域であり、さらなる整形外科医の確保について、広島病院からの支援も得て対応してほしい。(木倉) ■現有的人材の育成が、感染症対策を機に広く行われたものと理解している。(谷田) ■定年退職については再任用の柔軟な運用が必要。広島病院とさらなる連携が必要。(中西) ■コロナ禍でできることが少なかったと思うが、広島病院の地域研修以外実績がないので、このようにした。(平谷) ■看護学生や救急救命士の実習受け入れ中止は昨年の時点ではやむを得ないと思う。ただ、ワクチン接種が進み、検査体制も整ってきた中で、今後は学生さんたちに少しでも貴重な現場を体験する機会を提供できないか考えていただければと思う。(吉村) ■研修医の確保できたことはよかった。医師が不足しているかが不明。看護師の実習受け入れができなかったことは仕方がないが、R3に期待。(和田)

【令和2年度 評価表(安芸津病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
III 患者満足度の向上				
⑦ 患者満足度の向上・広報の充実	<ul style="list-style-type: none"> ■患者アンケートによる満足度は、入院は95%を超える高水準となっている。 ■外来のアンケートについては新型コロナ対策として中止とした。 ■院外広報誌の発行、町広報誌等への寄稿など、地域への医療情報の発信などに積極的に取り組んだが、研修会や地域の活動、院内のイベントなどの多くを中止とした。 	○	○	<ul style="list-style-type: none"> ■患者アンケートによる入院の満足度は入院99%を超えており、高水準で維持されていることを高く評価する。 ■年4回の広報誌を見ると、病院のスタッフや機能の説明とともに、新型コロナへの適切な対応方法や、がん検診など必要な検診への正しい知識などが毎回わかりやすく編集されている。 ■今後、WEBを活用した広報活動を期待する。
⑧ 業務改善	<ul style="list-style-type: none"> ■5S活動については部署での活動を継続して取り組んだが、TQM活動についてはサークル活動が難しいため中止とした。 	○	○	<ul style="list-style-type: none"> ■コロナ禍でTQMサークル活動は中止せざるを得なかったが、5S活動は各所属ごとに継続されている。 ■当面は活動停止や縮小もやむを得ないが、職場ごとでの5S活動は継続しつつ、TQMサークル活動のノウハウが途絶えないよう再開可能な時期を見定めてほしい。 ■今後は、コロナ禍でも手法習得者を増やすためWEB等を活用した取組を検討されたい。
IV 経営基盤の強化				
⑨ 経営力の強化	<ul style="list-style-type: none"> ■週1回の病床管理ミーティングの実施など、円滑な病床管理の促進に取り組んだ。 ■全体の病床稼働率が前年度を下回り、地域包括ケア病床稼働率についても前年度から低下した。 	△	○	<ul style="list-style-type: none"> ■コロナ禍において、重点指標である1日平均患者数及び地域包括ケア病床稼働率は、目標及び前年比を下回った。一方、毎週の管理ミーティングで円滑な病床管理が行われており、在院日数は次第に短縮されている。 ■また、経営力は病床管理にとどまらなと見え、診療のアクティビティに制約を受けるのであれば、その中の経営力強化について視野を広げることも必要である。
⑩ 増収対策	<ul style="list-style-type: none"> ■各種加算の取得・維持に努めたが、入院や外来患者数の減少などから医療収益は前年度を下回り、目標に及ばなかった。 	△	○	<ul style="list-style-type: none"> ■未収金は減少したが、人口減少による患者の減少傾向は変わらず、コロナ禍も加わり、医療収益は減少した。人口規模に見合う外来・入院機能への見直しが必要である。 ■また、耐震化対応に伴う整備計画では、中長期の視点から、地域に必要な診療機能や病床規模を検討し、経営力の向上を図ることを期待する。

委員評価	委員意見
◎2 ○5	<ul style="list-style-type: none"> ■患者アンケートの満足度は極めて高い。コロナ禍にあっても医療相談件数は目標を大きく上回っている。後発医薬品数量割合は90.8%と極めて高水準を維持している。年4回の広報誌を見ると、病院のスタッフや機能の説明とともに、新型コロナへの適切な対応方法や、がん検診など必要な検診への正しい知識などが毎回わかりやすく編集されている。 ■患者満足度は極めて高い水準を維持しているが、人口減少と高齢化の中で、ただちに患者数増加につながらないのはやむを得ない。引き続き、患者第一の視点での取組に努力してほしい。後発医薬品の使用割合は極めて高く伸びしろも少なくなっており、患者満足度の指標としては特出しなくていいのではないか。(木倉) ■入院の満足度99%は驚くべき高さであり、それに至る職員の皆さんの患者対応の良さを想像する。(谷田) ■患者アンケートの評価は依然高いが、医療相談の提言も踏まえて評価とした。今後相談は、WEB等の活用も検討してみても思われる。(平谷) ■患者満足度調査は入院だけだったが、高水準。研修会、地域の活動については新型コロナが影を落とす。やむを得ないことは思う。(吉村) ■満足度99%は素晴らしい。 ■広報もWEBでの開催を検討すべき。広報の中身を再検討する。(和田)
○6 -1	<ul style="list-style-type: none"> ■コロナ禍でTQMサークル活動は中止せざるを得なかったが、5S活動は各所属ごとに継続されている。当面は活動停止や縮小もやむを得ないが、職場ごとでの5S活動は継続しつつ、TQMサークル活動のノウハウが途絶えないよう再開可能な時期を見定めてほしい。(木倉) ■TQMとしての活動はリスク回避のために強い制約を受けたものと理解し評価の対象としなかった。(谷田) ■コロナ禍における活動の工夫を期待する。(中西) ■新型コロナは継続状況にあるので、今後はコロナ禍でも手法習得者を増やす取組を検討されたい。(平谷) ■コロナ禍でやむを得ないこととはいえ、TQM活動が中止となったため、前年の評価から下げた。(吉村) ■WEBの活用で、中止を避けるべきであった。(和田)
◎4 △3	<ul style="list-style-type: none"> ■コロナ禍にあっても、毎週の管理ミーティングで円滑な病床管理が行われている。高齢化先行地域として、地域住民の在宅生活を支援していくべき地域包括ケア病床はよく活用されていて、稼働率は高く、在院日数は次第に短縮されている。 ■人口減少と高齢化の進行に応じて、これから具体化する耐震化に伴う整備においても、全体の病床規模、一般病床と地域包括ケア病床の規模を見直すとともに、今後とも弾力的な運用や見直しを続けて地域住民の支援と健全経営を続けてほしい。(木倉) ■経営力は病床管理にとどまらなと見え、診療のアクティビティに制約を受けるのであれば、その中の経営力強化について視野をひろげることも必要ではないかと考える。(谷田) ■新型コロナのなか比較的良好成績である。(中西) ■コロナ禍にあつては、病床稼働率の低下はやむを得ないと考えた。(平谷) ■病床稼働率が前年度を下回った他、医療収益中の人件費割合が4.7Pアップしている。(吉村) ■当地区における患者の入院先の情報を入手して、当病院で治療可能は疾患が外部流失していないかを検討すべき。(和田)
◎4 △2 -1	<ul style="list-style-type: none"> ■R元は医療収益は微増したが、人口減少で患者数の減少傾向は変わらず、コロナ禍も加わり、R2の医療収益は減少した。「課題は入院・外来の患者数の確保」とあるが、人口減少と高齢化の中では、人口規模に見合う外来・入院機能となるよう常に見直ししていくことが必要である。 ■耐震化に伴う整備計画では、中長期の視点から、訪問看護の充実や介護サービスとの連携も考慮して、地域に必要な診療機能や病床規模を検討して経営の維持を図ってほしい。(木倉) ■未収金の減少等を評価の根拠とした。(平谷) ■入院・外来患者数の低迷はコロナの影響。医療収益の増加策として、新たな加算を取得する一方、未収金発生抑制に努めている。(吉村) ■入院単価をせめて40,000円に持っていき活動を行う。(和田)

【令和2年度 評価表(安芸津病院)】

取組方針	取組総括	自己評価	委員会評価案	委員会意見 (とりまとめ案)
IV 経営基盤の強化				
⑪ 費用合理化対策	■各種契約内容の見直しを行い、経費削減に取り組んだが、大きな成果には至っていない。	△		■入院単価や外来単価は改善してきており、後発医薬品使用数量割合は90%超と極めて高く、契約方法の見直しなど、努力を重ねているのは伝わってくるが、十分な成果が得られていない。
V 目標指標				
⑫ 決算の状況	■入院患者数の減少等により医業収益が減少したが、経常収支は医業外収益の増加により、目標を上回った。	△	△	■医業収支は前年度より悪化し、新型コロナ関係の他会計補助金等の医業外収益があり経常収支が目標を上回ったものの、黒字化が達成されていない。 コロナ禍の医療経営としては、減収減益は仕方がないが、費用コントロールが不十分である。
⑬ 目標指標の達成状況	■新型コロナの関係で、入院・外来患者数が低迷し、手術件数や内視鏡検査件数などが未達成となった。 ■新型コロナ対策上、接触を避ける必要性から、研修会を中止とした。	—	—	■未達成項目が13項目であり、昨年度の6項目から大幅に増加した。高齢化・人口減少で、外来・入院ともに減少し、さらに新型コロナの影響もあり、手術件数や内視鏡検査件数が大きく減少した。

総合評価	○	■新型コロナの流行にも関わらず、地域との連携に努め、影響を最小限に抑えることで、医療体制維持に貢献したことを評価する。また在宅復帰支援を充実しながら、地域包括ケア病床を高稼働率で維持しており、中山間地の高齢化先行地域で、地域包括ケアの拠点として目標意識を明確にする努力がみられる。 さらに県立病院として、安芸津病院に求める機能と地元自治体で整備していく機能との役割分担を明確にし、その全体像の中で、強みのある分野に人員と機能を集中していくべきであり、今後は、耐震化対応に伴う整備計画を具体化していくことになるが、行政とよく連携して、地域の医療介護資源の全体像の中で、安芸津病院の機能が適切に位置づけられ経営が持続できることを期待する。
------	---	--

委員評価	委員意見
○3 △3 —1	■医療費用は抑制されている。入院単価や外来単価は改善してきており、後発医薬品使用数量割合は90.8%と極めて高い。しかし、高齢化・人口減少で外来患者・入院患者ともに減少傾向は続いている。耐震化に伴う整備計画では、中長期の視点から、訪問看護の充実や介護サービスとの連携も考慮して、地域に必要な診療機能や病床規模を検討して経営の維持を図ってほしい。(木倉) ■全国的に市場が逼迫している状況にあって、また、PPEなどの感染対策資材を必要とする状況にあって、平時の視点での評価はフェアではないと考えた。(谷田) ■後発医薬品を使用した医療割合は高水準。契約方法の見直しなど、努力を重ねているのは伝わってくる。(吉村)
○1 △6	■高齢化・人口減少で患者の減少傾向は続いている。医業収支は前年度より悪化した。新型コロナ関係の医業外収益があつて経常収支はマイナスながらも目標を上回った。 人口減少と高齢化で、今後も医業収支の大きな改善は困難である。地域包括ケアのモデルの在り方としては、人口規模に応じて病床規模や診療機能を見直しながら、在宅介護事業者や介護施設との連携も進め、地域完結型の総合的な医療介護サービスで地域生活を支えてほしい。(木倉) ■単に赤字を評価したのではなく、県立病院として、地域の危機対応に物足りなさを感じたため評価を一段下げることとした。(谷田) ■新型コロナの影響のなか評価は難しい。(中西) ■経常収支が目標を上回ったものの、黒字化が達成されていない。(吉村) ■コロナ禍の医療経営としては、減収減益は仕方がないが、費用コントロールが甘いのではないかと。(和田)
—	■高齢化・人口減少で、外来・入院ともに減少。さらに新型コロナの影響もあり、手術件数や内視鏡検査が大きく減少した。未達成項目がR元の6項目から、R2は13項目に大幅に増加した。健(検)診件数、地域包括ケア病床の在宅復帰率、介護支援連携指導料加算、医療相談件数、訪問看護実施件数は伸びている。これらの項目からみて、地域生活を支える病院機能はよく発揮されており、努力の成果といえる。 耐震化に伴う整備計画においては、患者数の変化とともに、在宅生活を支えるこれらの指標を踏まえて、病院の診療機能や病床数を検討して経営の維持を図ってほしい。(木倉)

○6 △1	■新型コロナの流行にも関わらず、地域との連携に努め、影響を最小限に抑えることで、県内の医療体制維持に貢献したことは高く評価されるべきと考える。(大毛) ■高齢化・人口減少が続く中で、新型コロナの大きな影響が長引いており、外来・入院患者ともに減少し手術件数も減少している。一方で、地域包括ケア病床の在宅復帰率は高く、健(検)診件数や訪問看護実施件数は着実に伸びており、在宅支援機能は発揮されているといえる。医業収益は減少したが、医療費用は抑制されている。中山間地の高齢化先行地域で、地域包括ケアの拠点として、在宅復帰、在宅支援の目標意識を明確にして努力している。 地域包括ケア病床をよく活用し、在宅復帰支援も充実しながら、訪問看護も頻度高く実施している。しかし、県立病院だからといっても、不足している医療介護サービスのすべてには対応できない。地域包括ケアを総合的に推進すべき主体は、地元自治体である。単身高齢者が増える中では、高齢者住宅、老人ホーム、福祉の訪問通所サービス等の受け皿も総合的に整備する必要がある。地域医療構想調整会議などの議論では、安芸津病院に求める機能と、地元自治体で整備していく機能との役割分担を明確にし、その全体像の中で、強みのある分野に人員と機能を集中していくべきである。今後、耐震化に伴う整備計画を具体化していくことになるが、行政とよく連携して、地域の医療介護資源の全体像の中で、安芸津病院の機能が適切に位置づけられ経営が持続できることを望む。(木倉) ■単に赤字を評価したのではなく、県立病院として、地域の危機対応に物足りなさを感じたため評価を一段下げることとした。(谷田) ■新型コロナのなか目標に達していない項目もあるが全体としてはよく頑張っていると評価する。耐震化の事業が現在進んでいる。病棟建替等大きな課題を抱えており県との連携を十分とること。(中西) ■前年度より評価を下げた項目は主に新型コロナの影響部分。地域の中核病院としての役割をしっかりと果たしている。(吉村)
----------	---